1890 年代から 1900 年代の『レディース・ホーム・ジャーナル』にみる クリスマスの贈り物としてのモダン・レース

三宅　真未*

Modern Lace as a Christmas Gift in *Ladies' Home Journal*（1890–1900）

Mami MIYAKE

Abstract

Modern lace-making was promoted by Sara Hadley (1860–1927), a famous lacemaker in the United States. Modern lace was made by women daily, especially in the 1900s, often as a gift for Christmas.

Previous studies indicate that while ready-made products were becoming popular in people's lives at that time, handwork at home was valued and handmade Christmas gifts were preferred. However, the act of gifting handmade lace at Christmas has not been researched in detail.

This study considers how the gifting of modern lace for Christmas was featured in women's magazines. It was found that modern lace was a suitable Christmas gift from mothers, since it demonstrated a mother's affection for her family members. Furthermore, the gifting of modern lace was related to education to help her daughter acquire ideal behavior.

Keywords: America, modern lace, hand-made, Christmas gift, mother

1　はじめに

モダン・レースとは、機械製のブレード（braid）をモチーフの枠として使用し、枠内に多種多様なステッチを施すことで透かし模様を作るレースの総称である。モダン・レースは、19 世紀末から 20 世紀初頭のニューヨークでレースの作り手として活躍していたサラ・ハドリー（Sara Hadley, 1860-1927）が、自身の店舗での販売や、婦人雑誌および手芸雑誌への寄稿などを通して普及活動に努めたことで、中産階級の女性たちを中心に人気を集めたことで知られている[1]。

このような中産階級の女性たちによる家庭内でのモダン・レースの製作に関しては、拙稿「1890 年代から 1900 年代のアメリカにおけるモダン・レースの製作 ―『レディース・ホーム・ジャーナル』にみる理想の母親像―」において、家庭経営を上手くこなす同時代の理想的な母親の振る舞いと密接に結びついていることを明らかにした[2]。モダン・レースは容易な手順で安価に製作できることもあり、家事や子育てを一任された母親たちが家事労働の空き時間を利用するのに最適なものとされた。加えて、母親たちが手作りしたモダン・レースの大半は家族の衣服や室内を装飾するためのレースであり、手芸の気晴らしの時間さえも家族にとって有益な家事をす

キーワード：アメリカ、モダン・レース、手作り、クリスマスの贈り物、母親

* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

る時間へと帰結していた。つまり、モダン・レースを作る行為には、家事や子育てをきちんとこなした上で、家計に配慮しながら余暇を家族のために有効に使うことのできる、家庭管理の能力に長けた母親の姿が表象されていた。他方で、モダン・レースは、とりわけ 1900 年代に中産階級の女性たちの間で、クリスマスの贈り物として製作されるようになっていく。では、これまでに筆者が考察したレースを家庭内で手作りする行為以外に、製作したレースをクリスマス・プレゼントとして贈る行為にはどのような象徴性があるのだろうか。

アメリカにおいてクリスマスは、19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、製造業者や小売業者、広告会社が人々にクリスマス・プレゼントの調達を促したことで宗教的な側面よりも世俗的な側面が強まったとされる[3]。そして、一年に一度、家族が集まって食卓を囲み、プレゼントを贈る行為がアメリカ社会で定着し、クリスマスは家族の絆や子供への愛を再確認するアメリカ文化の重要な側面の一つとなった[4]。そのためクリスマスに贈る品物は、アメリカの社会や経済状況と密接に関係しており、それらの変化とともに移り変わっていったことが明らかにされている[5]。

具体的には、1880 年代までのアメリカの農村部では、秋の農作物の収穫後の時間を用いて、女性は縫い物、男性は木製のおもちゃなどを子どものクリスマス・プレゼントのために手作りで準備していた。しかし、アメリカ国内の産業化や都市化が進むにつれ、家庭でクリスマスを祝うための食事やプレゼントの準備は女性が全て行うようになり、男性は必要な費用を用意するのみとなった。そして、1920 年代にかけてそれまでの手作りの贈り物に代わって、スケーターや人形、そりなどの既製品が子どもたちへの贈り物として登場すると、女性たちの間でクリスマスの時期に百貨店や小売店などで買い物をする文化が定着していった。また、既製品の贈り物が主流になるまでの間の 1900 年代から 1910 年代には、家具の組み立てキットや自身で色付けするモノクロのクリスマス・カードなど、最後の仕上げのみを自分の手で行うための商品も販売されていたことが指摘されている[6]。これらの商品は、手作りから既製品の贈り物へと変化する中間期に存在した「ハーフウェイ・アイテム（halfway item）」と称されている。

このように、1910 年頃までは手作りのクリスマス・プレゼントに対する人気は保たれていたものの、具体的にどのような手作りの品物が家族に贈られていたのかについては詳細に検討されていない。つまり、19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカでは日常生活に既製品が浸透しつつも、女性がクリスマスに贈り物をする際には手作りの品物が好まれた事実があったにもかかわらず、手作りのレースを母親が家族にクリスマス・プレゼントとして贈る行為については詳述されてこなかった。

よって本論文では、アメリカの中産階級の女性たちに対して、クリスマスにモダン・レースを贈る習慣が雑誌記事でどのように紹介されたのかについて考察し、モダン・レースをクリスマス・プレゼントとして家族に贈る行為にいかなる意味があったのかを明確にする。そして、母親である女性たちがモダン・レースをクリスマスの贈り物とすることは、家族への愛情の指標や娘に対する教育の意味が込められていた可能性について検討する。なお、考察にあたっては、1889 年にアメリカで最大の発行部数を誇っていたとされる中産階級向けの婦人雑誌『レディース・ホーム・ジャーナル（*The Ladies' Home Journal*）』[7]や 1901 年に出版されたサラ・ハドリー監修の手芸書『モダン・レースメーキング：上級編（*Modern Lace-Making: Advanced Studies*）』[8]を主に使用する。

2　贈り主としての役割

2.1　節約と愛情

1890 年代から 1900 年代にかけての『レディース・ホーム・ジャーナル』の誌面では、クリスマスの際に手作りの贈り物をすることに関する記事が毎年掲載され、贈り物を作るための材料や費用、作り方などが説明された。そして手作りの贈り物に関する記事では、しばしば家計の節約や生活費のやりくりについても言及された。たとえば、「1 ドル以下で作れるクリスマス・プレゼント」[9]や「わずかな費用しかかからない贈り物」[10]といった題名の記事で、限られた費用や材料でクリスマスの贈り物を安価に作る方法を紹介していた。両者の記事の内容を通して、贈り物は家計を圧迫しないよう、お金をかけずに準備することが重視されていたことを読み取れ

る。加えて、後者の 1901 年 11 月号の記事の冒頭では以下のようにも述べられている。

> 時間やお金を多く費やす必要のない、上品で芸術的な贈り物は、全ての女性が持っているシルク、サテン、リネンの小さな生地でこしらえることができるだろう。愛情深い手によって作られたものならば、贈り物はいっそう大事なものになる。この頁に掲載されたクリスマスの贈り物は簡単に同じものを作ることができる。そしてどれも有用で、貰った人にとってきっと価値あるものとなるだろう[11]。

同記事の中で、「愛情深い手」によって作られた贈り物に価値が見出されているように、たとえ身近なものを利用して短時間で作った品物であっても、手作りであればその価値は込められた愛情によって増すとされていた。つまり、家事や子育てに多くの時間を費やさなければならない女性たちに対しても、わずかな時間を利用して手作りすることが、クリスマスの贈り物を準備する上で重要視されていたといえる。この他にも、1894 年 12 月号の特集記事「クリスマスの贈り物のための可愛らしい小物」では、自分自身で編んだ物をクリスマスプレゼントとして贈ることについて、以下のように記されている。

> 贈り主によって作られた作品は、購入したものよりもきっと費用はかからない。どんなにお金を出しても購入できない相手への思いやりを込めるために、一針一針編んでいくのである。この静かな愛のメッセージを贈る際は、きちんとした箱に入れて優美に包装するのが良い[12]。

自ら贈り物を製作した場合には、既製品を購入した場合と比べて費用がかからないため、品物を丁寧に完成させることに加えて、渡す際にも手間をかけて包装し、品物を収める箱も美しく仕上げることを促している。要するに、贈り物をする際に重要なことは、金額ではなく相手への愛情や思いやりであるとされた。また同記事の中で、手作業によって贈られるものには「愛のメッセージ」が込められていると記されていることから、手作りの贈り物には、高い金銭を払っても購入することのできない手作り特有の価値が見出されていた。よって、プレゼントを手作りする理由はお金の節約のためというわけではなく、手間をかけ、贈る相手のためだけに独自のプレゼントを用意したことを相手に示すためでもあった。

というのも、大衆消費社会を迎えた 19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカ社会では、既製品が流通しており、「クリスマス・ファー（Christmas furs）」や「ホリデー・ハンカチ（holiday handkerchiefs）」と謳われたクリスマス・プレゼントとしての商品も 1 ドルから 10 ドル代の幅広い価格帯で販売されていたとされる[13]。それゆえ、中産階級の女性たちは自身でクリスマス・プレゼントを必ずしも作って用意する必要はなく、安価な既製品を購入するという選択肢もあったのである。

2.2　娘への教育

『レディース・ホーム・ジャーナル』の誌面では、読者である中産階級の女性たちに手間をかけて手作りの品物を贈ることを促していた。加えて、手作りの贈り物を準備する能力は幼少期から身につけておくことが期待された。たとえば、同誌では「クリスマスのために 6 人の少女がどのように準備をしたか」[14]や「母親と祖母のためのクリスマス・プレゼント」[15]といった特集記事を通して、少女が家族や知人のために自ら簡単な縫い物をして作り上げる小さなポーチやブック・カバーなどが紹介された。とくに前者の 1905 年 12 月号の記事では、「マーガレットは母親の緑色のドレスに付ける白い折り返し襟に刺繍を施した」という紹介文、および「アリスが兄のために作った贈り物は非常にシンプルなものであった」といった説明文とともに、実際に 6 人の少女たちが作成したと考えられる贈り物の写真が掲載された（図 1）。

この他にも、1909 年 12 月号の同誌の記事「クリスマス・プレゼントを自作する少女」からは、手作りであることがいかに重視されていたかをうかがい知ることができる。同記事では、少女が姉妹や両親、友達に贈るための手作りのクリスマス・プレゼントが提案され、手作業による出来栄えに不安を抱く読者に対して、以下のように諭している。

> クリスマス・プレゼントを自分で作ることは、［クリスマスの］季節の雰囲気を感じとるにつれて、少女たちの［プレゼントを］あげる喜びを増幅させる。…ただ、「絵も描けなければ、刺繍もできず、自分には芸術的な才能がない」という少女の声を耳にする。…そのことについて考慮し、ここでは、あなたが作れる

魅力的な贈り物を提示する。それらを作るには、忍耐といくつかの注意点を必要とするが、「芸術的な能力」が要るわけではない[16]。

同記事からは、1900 年代のクリスマスに少女たちが手作りのプレゼントを贈る習慣があり、手作りの品を贈ることで「あげる喜び」を感じている少女たちが存在していたことがうかがえる。一方で、手先を使うことを不得意とする少女たちにとっては手作りの品を贈ることは困難であったようである。そのことに対して、同記事では「芸術的な能力」は必要ない上、注意をすれば魅力的な贈り物を作ることができると主張している。そして同記事の続きでは、ボール紙に模様付きの布地を貼り付けて作る携帯用の小物入れや、リボンを縫い合わせて作る小さなポーチなど、誰もが手軽に作れる贈り物が提案されている。換言するならば、簡単に作ることができるものであっても、家族や友人への贈り物は手作業によるものであることが少女の頃から重んじられていた。

そのため母親たちは、自分の娘に手作りの品を贈る習慣を身につけさせる必要があった。実際、1909 年 12 月号の同誌の特集記事「クリスマスにおける若い母親のためのガイド」では、「クリスマスに関する母親の質問」が設けられ、次のような質問と回答が掲載された。

> 10 才の小さな女の子に、自分一人でクリスマスプレゼントを作らせることは良い考えだと思いますか？…はい。それは進んで行うべき素晴らしい計画であり、彼女たちにとってかなり良い教育となると思います。そうすることで、少女たちは、贈り物は自分たちがあげるものだと真にわかり、身内の人々はこの手作りの贈り物を非常に高く評価するでしょう[17]。

この質問コーナーでは、娘に独力でプレゼントを作らせようとする母親の姿勢に対して、「良い教育」であると肯定する編集部の意見が示されており、女性には家族や親族に手作りのプレゼントを贈る役割が与えられていたことが理解できる。その結果、幼少期から贈り主としての役割を心得ておくことは、少女たちにとって「良い教育」に繋がるとされ、母親が娘に施すべき教育として読者に提示されたのであろう。

以上のように、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて、アメリカの中産階級の家庭ではクリスマスに女性が手作りの品を贈る役割を担い、女性こそが手作りの品を周囲に贈るべき存在だと考えられていた。そのような状況下で、母親たちが取り組んだのは、娘に対して手作りの品を贈る理想的な女性の振る舞いを身につけさせることであった。ただし、20 世紀初頭になると『レディース・ホーム・ジャーナル』のクリスマスの贈り物に関する特集記事の内容に変化が見られるようになる。その変化とは、サラ・ハドリーによる贈り物用のレースの特集記事が同誌に掲載されるようになったことである。

3　モダン・レースを贈る行為

3.1　サラ・ハドリーによる提案

サラ・ハドリーは 1890 年代より『レディース・ホーム・ジャーナル』に寄稿した記事の中で、手作りレースを贈り物にすることを推奨していた。そして後述するように、同誌の 1901 年 11 月号の特集記事「レースで作るクリスマス・プレゼント」[18]を皮切りに、クリスマスの時期にモダン・レースに関する記事が年々増加していくようになる。それでは、『レディース・ホーム・ジャーナル』の読者である中産階級の女性たちにクリスマスの際、手作りレースを贈る行為はどのように紹介されていったのだろうか。

ハドリーがモダン・レースを贈り物として製作することに初めて言及したのは、1892 年 11 月号の同誌の記事「アイディール・ホニトンにおけるデザイン」（図 2）においてである。同記事では、「アイディール・ホニトン」と名付けられたモダン・レースのデザインや用途、製作の手順などを紹介するとともに、クリスマスの贈り物について次のように記された。

> 最新のアイディール・ホニトンは、淡い色の絹製のハンカチや匂い袋のカバーへの装飾として使用できる。これらは、とりわけ目新しく、上品なクリスマスの贈り物となるだろう[19]。

アイディール・ホニトンとは、ハドリーによれば「亜麻の生地に施されたさまざまなブレードによって、全てのデザインが本物のホニトン・レースに使用された代表的な模様を忠実に模倣するよう製作できる」[20]ものであ

るという。つまり、アイディール・ホニトンは、「本物のホニトン・レース」のデザインをブレードで再現したモダン・レースの一種であるといえよう。なお、ホニトン・レースとは、17 世紀のイギリスで製作され始めたボビン・レースで、仲介業者がホニトンの町で集荷した後にロンドンへ出荷したことからその名称が付けられた。また、ホニトン・レースは 19 世紀半ばにヴィクトリア女王のウェディング・ドレスに使用されたことで再び注目を浴びたことでも知られる[21]。実際、読者は同記事に従ってアイディール・ホニトンを製作することでホニトン・レースを「忠実に模倣」することができ、「本物の」ヨーロッパの手工レースのような精巧で美しいレースを作ることができた[22]。その手作りしたレースをハンカチやカバーに飾り付けることで、価値のあるレースをクリスマスの贈り物として用意することができたのだろう。

他方で、モダン・レースは、作り手が入手しやすい材料で容易に製作することができた点でも、中産階級の女性たちが準備する贈り物として好まれたと考えられる。材料に関しては、『モダン・レースメーキング : 上級編』の中で、「モダン・レースを作るにあたり、必要な材料は多くもなく高価でもない」[23]と述べられ、次の道具が紹介されている。モチーフの枠を作るためのブレードをはじめ、レースのパターンが描かれたトレーシング・リネン、トレーシング・リネンの土台として使う革またはモスリン、リネン糸、針、指貫、はさみである[24]。指貫やはさみなどのように、日常的に針仕事をする上で必要な道具は、大半の女性たちは新たに購入する必要がなかったと考えられる。さらに、モダン・レースの製作に必須のブレードやレースのパターンは、サラ・ハドリーのようなレースメーカーが営む専門店や雑貨を扱う小売店で直接購入することができた以外にも[25]、当時発行された手芸雑誌や手芸書などを通して注文することができた[26]。たとえば、手芸書『1898 年のプリシラ・ニードルワーク・ブック（*The Priscilla Needlework Book for 1898*）』では、「バテンベルク・レースにおける子供用の襟」[27]の挿絵（図 3）が掲載され、読者は挿絵と同様のパターンを 35 セント、製作に必要なブレードや糸などの材料を合わせて 1 ドルで注文することができた[28]。よって、モダン・レースに必要な材料は、専門店や小売店が集まる都市部だけでなく、郊外に住む女性たちも都市に赴くことなく手軽に入手することができたと推察される。このことは、贈り物を準備する際の女性たちの負担を大いに軽減しただろう。実際、ハドリーは自身が提案するモダン・レースのデザインについて、1900 年 6 月号の同誌の特集記事「新たなレースのスカーフと襟」の中で、以下のように述べている。

> 今やこの広大な土地や他の国々の何千人もの女性たちが、自分自身や友人の衣服のためのレースを作るために余暇の時間を費やしている。…それら［本頁に掲載されたデザイン］は、魅力的なだけでなく、比較的単純に、そして適度な出費で収まる範囲で作ることができる[29]。

上記の特集記事から、20 世紀初頭のアメリカの女性たちの間でレース作りが広まっていた様子を知ることができる。彼女たちは、とりわけ余暇を利用してモダン・レースを製作しており、その目的は、自身が身につけるのは勿論、友人に贈るためでもあった。身近な材料で多額の費用をかけずとも、贈る相手に応じてデザインを選び、ヨーロッパの手工レースと見まがうような美しいレースを手作業によって完成させることで、モダン・レースは、相手のためだけに用意する手作り固有の価値を持つ贈り物となっただろう。

3.2　クリスマス・プレゼントとしてのモダン・レース

ハドリーの影響もあり、20 世紀初頭の『レディース・ホーム・ジャーナル』の記事では、クリスマスの時期に手作りレースを贈ることが頻繁に紹介されるようになる。1901 年 11 月号の同誌の記事「レースで作るクリスマス・プレゼント」では、ハドリーによってデザインされたクリスマス・プレゼント用のレースが初めて掲載された[30]。そしてモダン・レースを用いた贈り物の事例が写真付きで紹介され、贈り物の簡単な特徴や贈る相手としてふさわしい人物なども説明された。たとえば、レースの襟とカフスは「年配の婦人のための可愛らしいクリスマス・プレゼント、ホニトン・レースとポイント・レースで作られる」と紹介され、ポイント・レースと機械レースを組み合わせて作る「男性用のピンクッション」は紳士向けのプレゼントとして推奨された。また、同記事で紹介された贈り物のいくつかは、『モダン・レースメーキング：上級編』にも同様に掲載された[31]。このことは、贈り物の作品を完成させる以前に、女性たちはモダン・レース自体を作る必要があったため、『レディー

ス・ホーム・ジャーナル』の読者は、ハドリーの手芸書を購入して、より詳細なレースの作り方の手順を参照していたことを意味する。

さらにハドリーは、1903 年 9 月号の同誌の記事「クリスマスのために作るレース小物」[32]や 1909 年 11 月号の記事「クリスマスのレースと刺繍」[33]のように、彼女自身が考案したデザインのレースを使用する手作りの贈り物を提案した。これらの記事では、彼女が 19 世紀末に提示したテーブル・カバーやドイリー（卓上の敷物）などの室内装飾品よりも、襟やカフスを中心としたドレスに用いる装飾品がとりわけ多く見られる（図 4）。それゆえ、ハドリーによる贈り物の提案は、女性たちの間でレース装飾が好まれた 1900 年代の服飾流行を十分に反映させたものであったといえる[34]。レース装飾については、1906 年 1 月号の同誌の記事においてレースの取り付け方が紹介されているように[35]、当時の女性たちは、ドレスに使用するレースの縁飾りや挿しこみ装飾などの部分的な装飾を自らの手作業によってほどこしていた。さらには、使用したレースを取り外して別のドレスに付け替えることもたびたび同誌の記事で提案されていることから[36]、いかにレースが女性たちの装いに重宝されていたかがうかがえる。このような女性たちの需要に応じた贈り物の提案は、女性読者の関心を集めることに繋がり、ハドリーの評判をより高めたと考えられる。実際、同誌に掲載されたレースは「『レディース・ホーム・ジャーナル』のために特別にデザインされ作られた」[37]ものであることに加え、「ドレスや家庭装飾のための新たなデザインとして、ミスハドリーの唯一無二のレースを『レディース・ホーム・ジャーナル』は提供し続けるだろう」[38]と、但し書きによって明示されることがあり、ハドリーが提案したモダン・レースのデザインは読者の注目を集めていたことが推察される。

またドレスへの装飾以外に、1909 年 11 月号の同誌の記事には乳児用のレースの帽子も掲載されていたことから[39]、母親が自身の幼い子どものためクリスマス・プレゼントとしてレースを作って贈り、それを子どもに身につけさせていたことがうかがえる。この記事の他にも、女児用の上着につけるレースの襟や乳児用の靴の踵やつま先につけるレース（図 5）などが自作のクリスマス・プレゼントに関する記事で紹介されており[40]、母親が子どもへクリスマスにモダン・レースを贈っていた様子が読み取れる。とくに、娘が母親からレースを贈られることは中産階級の家庭では珍しいことではなかったようである。たとえば、1904 年 1 月号の『レディース・ホーム・ジャーナル』の記事「自身の服を作る少女」では、「もしかするとあなたは繊細なレースのついた布地をクリスマスの贈り物として貰ったかもしれない。それを使うと可愛らしいワンピースとなるだろう」[41]と述べられており、少女がクリスマス・プレゼントとしてレースを受け取っていることが想定されている。

しかしながら、1900 年代のアメリカでは安価な国内産の機械レースが普及するようになった時期でもあり、中産階級の女性たちは贈り物のレースを手作りするのではなく、既に製品として販売されている機械製のレースを購入して贈るという選択肢があったはずである[42]。さらには、工業化が進み、さまざまな既製品が普及し始めた同時代において、機械レースが付けられた既製の衣類や帽子などが販売されていたことも推測できる。そのような状況下において、ハドリーは『レディース・ホーム・ジャーナル』の読者に対して家庭で手軽に製作できるモダン・レースのデザインを提案し続け、完成したレースをクリスマスなどの年中行事の際に親しい人物や家族への贈り物とすることをたびたび推奨した。モダン・レースをクリスマス・プレゼントとすることは、既製品を購入することに比べると、準備にはより手間がかかったと考えられるが、作業自体の単純さや材料の入手のしやすさゆえに家事や子育てに勤しむ母親たちに対しても推奨することができたのだろう。実際、1908 年 12 月号の手芸雑誌『ホーム・ニードルワーク・マガジン（*Home Needlework Magazine*）』の記事「贈り物の準備に出遅れた人々のためのレースのヒント」では、たとえクリスマス・プレゼントの準備が遅れた場合であっても、既製品ではなくレースを手作りすることが勧められた[43]。そして同記事では、モダン・レースによる子ども用の襟やエプロンなどの作り方が紹介され、以下のように主張された。

> 何らかの理由のため、綿密な計画で針仕事を行えないことがわかった際、私たちは既製のものを購入するという、その場しのぎの手段に訴えようとしてしまう。しかしそれは、贈り物が私たち自身の手によって作り出された品物であることを知る喜びを、私たち自身と受け取る人から奪う。筆者の提案と嘆願は…既製のものに頼るのではなく、すぐに作ることができながらも優美で繊細な贈り物を選ぶことである。きっ

とこれは私たちの愛の明白な表現になるだろう[44]。

記事では、クリスマス・プレゼントの準備は計画的に進める方が良いものの、それが不可能であった場合に女性たちが既製品を購入するのではないかと危惧されている。対して、記事の寄稿者はそのことを諌め、相手への「愛の明白な表現」のために「すぐに作ることができながらも優美で繊細な贈り物を選ぶ」ことを読者に提案している。そしてそのような愛情表現のために贈り物として紹介されたのがモダン・レースを用いた品々であった。既に述べたように、モダン・レースは身近な道具や入手しやすい材料で美しいデザインのレースをすぐに作り始めることができた。クリスマスの時期には、家事や子育てなどの常務に加え、クリスマス・ディナーのための特別な食材の買い出しやクリスマス・ツリーの調達など[45]、家族でクリスマスを過ごすための準備に追われた女性たちにとって、手作りによる優美な品物を用意する際の負担が少しでも軽くなることは、モダン・レースをクリスマスの贈り物とする動機に繋がっただろう。クリスマスにモダン・レースをプレゼントとして贈る行為は、忙しい女性たちがわずかな時間の中で家族への愛情を明確に示す最適な手段となったのではないだろうか。

4　おわりに

19 世紀末から 20 世紀初頭のアメリカでは、既製品が流通しつつも、中産階級の女性たちの間では家事や子育ての合間を利用して手作りのクリスマス・プレゼントを贈ることが重要視されていた。手作りの贈り物は家計を圧迫することのないよう適度な出費で収めることが望まれたため、高価な品物ではなかった。しかし、限られた時間の中で手間をかけ、贈る相手のためだけに独自のプレゼントを用意する点において、贈り物としての価値が見出されていた。それゆえ、女性は幼少期から贈り物を手作りする習慣を身につけておく必要があり、母親が自身の娘にプレゼントを自力で作らせることは良い教育であると推奨されていた。

このように贈り物を手作りすることが女性の美徳とされていた状況下で、サラ・ハドリーは、1890 年代から『レディース・ホーム・ジャーナル』の記事において、モダン・レースを贈り物用として製作することを提案し続けた。そして、1900 年代にはクリスマス・プレゼントの特集記事の中でモダン・レースを贈ることが女性読者に対してたびたび紹介された。当時、女性や子どもの服飾に欠かせないものであったレースは、実用的な贈り物として女性たちの間でとくに好まれたと考えられる。また母親である女性たちには、日常生活では家庭を管理することが求められた上、クリスマスの時期には家族で祝祭を迎えるための特別な準備を全て任された。その中で、身近な材料で手軽に美しい贈り物を完成させることのできたモダン・レースは、クリスマス・プレゼントを準備する際の女性たちの負担を軽減させただろう。加えて、ありふれた既製品ではなく手作業によるモダン・レースを贈ることは、相手への愛情を示す上でも重要な意味を持った。

そして、手作りの品物を準備することが望まれた当時のアメリカ社会において、クリスマスに向けてモダン・レースを手作りし、家族に贈る母親の姿は、娘にとって贈り主としての役割を果たす手本になっていたのではないだろうか。モダン・レースは、一年に一度、アメリカの中産階級の母親たちが家族への愛情を示し、娘に手作りの贈り物文化を伝承していく教育的な意味でも、クリスマスの贈り物として何より相応しいものの一つであったといえよう。

図 1　　図 2

（図 1）「クリスマスのために 6 人の少女がどのように準備をしたか」（『レディース・ホーム・ジャーナル』、1905 年 12 月号、51 頁。）

（図 2）「アイディール・ホニトンにおけるデザイン」（『レディース・ホーム・ジャーナル』、1892 年 11 月号、15 頁。）

図 3　　図 4　　図 5

（図 3）手芸書に掲載されたレースのパターン「バテンベルク・レースにおける子供用の襟」（『1898 年のプリシラ・ニードルワーク・ブック』、1898 年、8 頁。）
（図 4）「クリスマスのために作るレース小物」（『レディース・ホーム・ジャーナル』、1903 年 9 月号、23 頁。）
（図 5）「レースの乳児用の靴」（『ホーム・ニードルワーク・マガジン』、1906 年 10 月号、338 頁。）

図 1・2・4・5 はハーティトラスト・デジタルライブラリ（パブリックドメイン）からの出典。
図 3 はアンティーク・パターン・ライブラリ（パブリックドメイン）からの出典。

---

[1] Jane V. Swanson, “Sara Hadley and Royal Battenberg Lace”, *Piecework*, Vol.3, No.5, Digital Edition, Long Thread Media, 1995, pp.29-30.

[2] 拙稿「1890 年代から 1900 年代のアメリカにおけるモダン・レースの製作 ―『レディース・ホーム・ジャーナル』にみる理想の母親像―」、『人間文化創成科学論叢』第 24 巻、お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科、2022 年、49-58 頁。

[3] William Waits, *The Modern Christmas in America: A Cultural History of Gift Giving*, New York, London, New York University Press 1998, p.3, p.19；松谷 淑子『アメリカン・クリスマスの誕生』、ブケイ、2011 年、30-34 頁。

[4] *Ibid*., p.3, p.130; James H. Barnett, *The American Christmas: A Study in National Culture*, New York, The Macmillan Company, 1954, p.129.

[5] William Waits, *op.cit*..

[6] *Ibid.*, pp.1-21.

[7] 1883 年にフィラデルフィアで創刊され、1900 年代までの価格は 1 冊 10 セント(1904 年からは 15 セント)、年間購読料は 1 ドルであった。*The Ladies' Home Journal*, Philadelphia, Curtis Publishing Company (以下、出版地および出版社は略記する).

[8] アメリカの型紙メーカーであるバタリック社より発行され、1 冊 118 頁、50 セントで販売された。*Modern Lace-Making: Advanced Studies*, London, New York, The Butterick Publishing Co. Ltd., 1901(以下、書名・頁数のみ表記する).

[9] “Christmas Present Which May Be Made for a Doller”, *The Ladies' Home Journal*, Nov. 1898, p.33.

[10] “Christmas Gifts that Cost but Little”, *The Ladies' Home Journal*, Nov. 1901, p.19.

[11] *Ibid*..

[12] “Pretty Things for Christmas Gift”, *The Ladies' Home Journal*, Dec. 1894, p.12.

[13] William Waits, *op.cit*., pp.21-22.

[14] “How Six Little Girls Got Ready for Christmas”, *The Ladies' Home Journal*, Dec. 1905, p.51.

[15] “Christmas Present for Mother and Grandmother”, *The Ladies' Home Journal*, Dec. 1909, p.88.

[16] “The Girl Who Makes Her Own Christmas Present”, *The Ladies' Home Journal*, Dec. 1909, p.84.

[17] “The Young Mother's Guide at Christmas”, *The Ladies' Home Journal*, Dec. 1909, p.51.

[18] “Christmas Present Made of Lace”, *The Ladies' Home Journal*, Nov. 1901, p.21.

[19] “Designs in Ideal Honiton”, *The Ladies' Home Journal*, Nov. 1892, p.15.

[20] *Ibid*..

[21] 市川圭子『アンティークレース 16 世紀から 20 世紀の美しく繊細な手仕事』、河出書房新社、2020 年、182 頁 ; Pat Earnshaw, *A Dictionary of Lace*, New York, Dover Publications, Inc., 1999, pp.80-81.

[22] 20 世紀初頭のアメリカでは、機械レースはイミテーション・レース(imitation lace)、手工レースは リアル・レース(real lace)と区別して呼ばれ、とりわけ後者のリアル・レースは上流階級の女性を中心に珍重された。

[23] *Modern Lace-Making: Advanced Studies*, p.41.

[24] モダン・レースの作り方の手順については、拙稿を参照のこと。

[25] *Modern Lace-Making: Advanced Studies*, p.42.

[26] とくにレースのパターンについては、1 冊 5 セント、年間購読料 50 セントで販売された 1887 年創刊の手芸雑誌『モダン・プリシラ(*The Modern Priscilla*)』で多く扱われ、25 セントから 30 セントで売られていたことが指摘されている(太田茜「20 世紀初頭アメリカにおける婦人雑誌と服飾記事の傾向」、『日本女子大学大学院紀要』第 18 号、家政学研究所・人間生活学研究科、2012 年、135-141 頁)。 なお、後述する『プリシラ・ニードルワーク・ブック』は、同手芸雑誌と同じ出版社から発行された手芸書である。主に『モダン・プリシラ』で扱ったレースや刺繍などを種類ごとに分けて書籍化したものと考えられ、1 冊およそ 50 頁から 70 頁で構成された。

[27] バテンベルク・レースは、1893 年のシカゴ万博でハドリーが出品したティークロスが賞を獲得したことでとくに注目を浴びた。その名称は、1885 年のイギリスのベアトリス王女(Princess Beatrice of the United Kingdom, 1857-1944)とバテンベルク家出身の王族ヘンリー・オブ・バテンベルク (Henry Maurice of Battenberg, 1858-96)との結婚式にちなんで、ハドリーが名付けた「ロイヤル・バテンベルク・レース」に由来するとされる(Jane Viking Swanson, *op.cit*., pp.29-30).

[28] *The Priscilla Needlework Book for 1898*, Boston, The Modern Priscilla, 1898, p.8.

[29] "The New Lace Scarfs and Collars", *The Ladies' Home Journal*, Jun. 1900, p.17.

[30] "Christmas Present Made of Lace", *The Ladies' Home Journal*, Nov. 1901, p.21.

[31] *Modern Lace-Making: Advanced Studies*, pp.85-86.

[32] "Lace Bits to Make for Christmas", *The Ladies' Home Journal*, Sep. 1903, p.23.

[33] "Christmas Lace and Embroideries", *The Ladies' Home Journal*, Nov. 1909, p.49.

[34] 当時の女性たちの装いは、ヨーロッパの服飾流行に倣った「S 字型シルエット」のドレスや、アメリカ国内の既成服産業の発達によって普及した「シャツ・ウエスト(shirt-waist)」にスカートという組み合わせが主流であった。ドレスにはレースが全面に使用されることもあり、シャツ・ウエストの胸元や肩、袖の部分にはレースによる縁飾りや襞飾りなどの装飾が施されることが多かった(Katherine M. Lester, *Historic Costume; A Resume of the Characteristic Types of Costume from the Most Remote Times to the Present day,* Peoria, C.A. Bennett, 1956, pp.214-216).

[35] "Hand Sewing on White Goods", *The Ladies' Home Journal*, Jan. 1906, p.56.

[36] たとえば、以下の記事で確認できる。*The Ladies' Home Journal*, Mar. 1903, p.58; *The Ladies' Home Journal*, Aug. 1903, p.40; *The Ladies' Home Journal*, Apr. 1908, p.92.

[37] *The Ladies' Home Journal*, Sep. 1903, p.23.

[38] *The Ladies' Home Journal*, Nov. 1909, p.49.

[39] *Ibid*..

[40] *The Ladies' Home Journal*, Dec. 1907, p.49; *Home Needlework Magazine*, Florence, The Florence Publishing Company, Oct. 1906, p.338(『ホーム・ニードルワーク・マガジン』は 1899 年に創刊された手芸雑誌で、創刊当初は年に 4 回発行され(1 月・4 月・7 月・10 月)、1 冊およそ 90 頁、年間購読料 25 セントで販売された。1906 年 10 月号からは、2 ヶ月に一度発行されるようになり(2 月・4 月・6 月・8 月・10 月・12 月)年間購読料 75 セントで販売された).

[41] "The Girl Who Makes Her Own Clothes", *The Ladies' Home Journal*, Jan. 1904, p.40.

[42] アメリカ国内の機械レースの歴史と普及については、以下の論考を参照のこと。日本繊維意匠センター編『レースの歴史とデザイン』、日本繊維意匠センター、1962 年、55-72 頁；拙稿「20 世紀初頭のアメリカ合衆国における国内産と海外製の機械レースの特徴–『ドライ・グッズ・ガイド（*Dry Goods Guide*）』にみるデザインと品質–」、『服飾学研究』第 5 巻、服飾文化学会、2023 年、1-12 頁。

[43] "Lace Hints for Belated Gift Makers", *Home Needlework Magazine*, Dec. 1908, Florence, The Florence Publishing Company, pp.507-509.

[44] *Ibid*., p.507.

[45] William Waits, *op.cit*., p.80.